サイタ、サイタ、花ガ咲イタ。
一輪ノ花ガ、咲イタ。
カワイソウニ。
一晩デ散ッテシマウノニ……ドウシテ咲イテシマッタノデショウ。
月下美人。
儚イ花。

サァ、ソノ花ビラヲ散ラスノハ、誰？

目次

一、出会い……13
二、天音の正体……33
三、舅苦……63
四、それぞれの心……111
五、死に誘われて……149
六、そうして舅苦は生まれた……195
七、神の夢……213
あとがき……227
番外編……233

Side Of REIZEI Amane

もうすぐ、冬。

鈴鳴屋（すずなりや）の支店ができたというので、わたしはその手伝いに村を出た。

隣の県だからと聞いていたのだけれど、いくつもの電車とバスを乗り継ぎ、そして、飛行機にも乗らなくちゃいけないなんて、思ってもみなかった。

汐碕（しおさき）市。

確かに空に浮いている街があるっていうのは知識では知っていたんだけれど……。

「う〜ん……」

空港に下り立って、ようやくそれを実感した。

周囲は観光客と思われる人がたくさんで、わたしはちょっと浮いているように感じた。

行く前にもうちょっと下調べをしておくんだった……。

わたしはそう思いながらも、キョロキョロと辺りを見渡して、目的の人物を捜す。

到着ロビーはぞろぞろと人が流れていって、わたしもその流れと一緒に押し出されるように、ゲートをくぐった。

「あまね――――――!!」

するとすぐにわたしの名前を呼ぶ声がした。

聞き覚えのある声。

同時に、ホッとする自分がいる。村を出て、ただ移動してきただけなのに、無意識のうちに緊張してたみたい。

「こっちこっち！」

相変わらずの通る声は、鈴鳴屋（すずなりや）で呼び込みをしていた成果なんだと思う。

「凜（りん）！」

わたしは声のする方に駆け寄ると、しっかとその相手の手を握った。

「お疲れ、お疲れ！」
いつも見る凜とはちょっと違う姿。
頭に耳がないし、それに尻尾もない。
「なに？ 来るなりあたしの顔をジロジロ見て？」
「あ、ごめんなさい……いつもとなんか、印象違うから」
わたしはあわてて握っていた凜の手をはなして、ちょっと照れた。
「へ？ なんか違う？」
「あ、うん、だっていつもは耳とか尻尾とかあるから」
「あはははは、ここは人間の街なんだから、いつもの格好なんてしてられないでしょ？」
「あ、うん」
「遠かったでしょ？ 疲れたんじゃない？ ホラ、荷物持つわよ！」
「あ、ありがとう……」
「術を使えばすぐ来られたのにね、あはははは」
「ダメよ、そんなことしたら。他の人を驚かせてしまうわ」
「それもそうよね」
凜はいつもの笑顔でわたしのカバンを持ってくれた。
彼女はいつも店の棚卸しとかしているし、わたしよりもずっと力持ちなんだなって、初めて実感する。
凜はわたしの住む村で雑貨屋をやっていた、そのなんて言うんだろう、猫又。
ずっとずっと古くから村に代々住んでいた猫みたい。
「こっちこっち――！」
わたしの荷物を持っているのに、わたしよりも歩くのがぜんぜん速い……。
わたしって体力ないのかなぁ……。
少し早足で、わたしは凜のあとを追った。
広いロビーを抜けて、長いエスカレーターを下りると、ピカピカに磨かれた白い床が広がって……その床を通り抜けると、やっと外に出られた。

「あ、待って、そのまま外に出たら……！」
「え？」
わたしは立ち止まった凜を追い越して、自動ドアの向こうに出てしまった。
「きゃ…!!」
ものすごい冷たい風がわたしの頬を叩くように通りすぎていく。
「つ、つめたい……！」
すごく寒い風。
「もー、上着持ってくるように言ったでしょ？ なに、持って来てないの？」
「わたしたちの村って寒いから、てっきり平気かと思ってしまって……」
「あのねー、ここは標高六〇〇〇メートル。あたしたちの村とは桁違いに寒いんだから！」
「ご、ごめんなさい……」
見渡せばそこは銀世界。
道路こそ雪は積もっていないけれど、建物はさっき通ってきた磨かれた床のように白かった。
「だいたい、飛行機から見下ろしたとき、気付かなかったの？」
「あ、そういえば……なんでわたし気付かなかったのかしら……」
「あのね、ほんっと天音（あまね）ってしっかりしていそうで抜けてるわよね。夕奈とぜんぜん変わらないんだから」
「ご、ごめんなさい……」
「ほら、これ着なさいよ」
凜が上着をわたしに放ってくれた。
「え、でも凜は？」
「大丈夫よ、これでもあんたよりは鍛えてるんだから」
そう言って力こぶを作ってみせる。
「ありがとう……」
「その分、たくさん働いてもらうわよ！」
「うん」

「あ、ちょうど電車着たわ。あの5番の市庁舎行きの電車よ」
凜が元気に駆けだしていく。
「あ、ま、まって……！」
わたしも慌てて凜のあとを追った。

Side of JINGUJI Hinako

「ねーねー、面白い雑貨屋ができたのよ！ 帰りに寄ってかない？」

相変わらずの黄色い声を響かせながら生徒会室に入ってきたのは、案の定、朝日奈（あさひな）やすらだった。

雑貨屋？

くだらない……買ってもどうせすぐゴミになるクセに……。

朝日奈は飽きっぽい性格なのを、わたしはよく知っている。

「すっごい可愛い猫のアクセサリとかストラップとかが充実してるのよ～～～！ もー、全部買い占めたいくらい!!」

朝日奈は誰に話すでもなく……いや、この部屋にいる全員に話しているつもりなんだろうけど、止めどなく言葉を続ける。

「で、生徒会終わったらさー、みんなで行かない？」

めんどうくさい。

と言うのがわたしの返事。

けれど答えるのも面倒くさい。

「まぁ、猫のですか？」

あぁ、しまった……ここにはつきあいの非常にいい人が一人いたんだった。やっぱりわたしがいの一番にめんどうくさいと言えば良かった……。

「しかもね、しかもね、瑠璃火（るりか）！」

やすらは一番に返事をしてくれた瑠璃火に絡むことにしたようだ。それだけでも少しホッとする。

「猫が店番してるのよ――!! きゃ――――!!!」

やすらは両手を振り回して喜んでいる。

「まぁ、猫が店番を!? そ、それはぜひ見てみたいです！」

あぁ、瑠璃火が乗り気になってしまった……。

「んじゃ、帰りに寄ってみるか？」

そしてトドメを刺したのは光人だった。
キミは男じゃないか。アクセサリとかストラップとか興味ないクセに。
「はい、ぜひ行ってみましょう」
「水帆と水翼も誘おう。あいつらも喜ぶんじゃないか？」
「ふふ、ですね」
「やた――――！」
結局みんな行くことになってしまったか。
ふぅ……。
自然とため息が出る。
「で？」
うわ……!!
いつの間にか光人がわたしの顔を覗き込んでいた。
「な、なに？」
「雛子はどうする？」
「え？」
「行くかい、その雑貨屋にさ」
めんどうくさい。
だいたいわたしは生徒会のメンバーでもないし……。
「鈴鳴屋って名前よ！ 汐碕支店って幟に書いてあったから、たぶん本店がどっかにあるんでしょうね」
「ま、まぁ、みんなが行くというなら……」
う、主体性のない答えをしてしまった。
「じゃ、決まりだな」
光人が満足そうに笑う。
まー、わたしにとっては行っても行かなくてもどちらでもいいこと……その程度のことなのかもしれない。
このときはそんなことを思っていた。

Side of Wizards

見渡す限りの雪景色を眺めながら、熱い紅茶をたしなむ。なんとも優雅な午後じゃ。

妾はちょうど書類の整理が一段落して、午後のおやつタイムを楽しんでおった。

妾がいる市庁舎は白いのじゃが、雪の白さはまた別の趣があるのう。なんというのじゃろう、月並みな言葉じゃが、銀が混じったそんな輝く白じゃ。

最近巷で流行っておるパール ホワイトと言うやつじゃな。

「ん？」

ふと視線を落とした時じゃった、書類の束に一通の封筒がはみ出しているのが見えたのじゃ。まだ開けられておらぬ、まっさらな封筒じゃ。

「おかしい……ここの束は全部見たはずじゃが……？」

妾がその封筒に触れたとたん、封筒からはただの紙ではないという感触が伝わってきた。同時に、あぁ、しまった、手に取るのではなかったという後悔の念が沸いてしまったのじゃ。

「……」

案の定、この封筒は執事によって届けられたものではなかった。

誰にも気付かれぬよう、妾だけに解るように、魔の力で送り届けられた手紙だったのじゃ。

封の所には月下美人をあしらった白い花のシールが貼ってある。このシールの意味するところは一つしかない……。

「ふむ、賢者が生まれおったか……」

まったく、この優雅な午後が台無しじゃ。

妾は丁寧に封をはがすと、四つ折りにされた紙を取り出した。

その紙には、ただ、一人の人間の名前が書かれてあるのみであった。

「今回は妾の陣営からじゃったのう、そういえば……。それにしても、賢者が生まれるのは何年ぶりのことじゃろう」

妾は時間が経つのも忘れ、しばらくその名前をじっと見つめておった。

解る、解るぞよ。

その者がどのような者であるか。

その生い立ちも、性格も、何もかも……のう。

「月下美人、今宵限りの花……」

今年のクリスマスは、悲しいクリスマスになりそうじゃな。

手に取った紅茶は、もういつの間にか、冷え切っておった……。

OZ Meets OZ !

一、出会い

鈴鳴屋汐碕店が開店したのは一〇月も末に近い頃だった。本家鈴鳴屋は湖の底に沈んでしまったが、店主の凜は鈴鳴屋再建に心を燃やしていたらしい。

数年の歳月をかけ、凜は東京の量販店で修行をし、開店資金を貯めたという。

最初は元の村に鈴鳴屋を出そうと思っていたらしいのだが、そもそも村は過疎地もいい所。店を出しても来るのは熊か狸か妖怪か……。

とはいえ東京に店を出すのは資金的にも大変である。

そんな折、九尾狐の彩が紹介してきたのが、この汐碕の地だったのである。

なんでも彩の古くからの悪友に、この地で不動産を営んでいる者がいるらしい。

「保証金は値切っといたから安心しなさいよ。はい、ここととここととここに判子押して？　あ、保証人は誰がいいかしらねぇ、天音にでもしとく？」

紹介だとぉ？

彩は両手一杯にワインを抱え、しかも真っ赤な顔で契約書を凜の前に突き出して来たのだ。

既にその物件を借りることになっているではないか。

あからさまに酒で懐柔されたのがよく解る。そして彩はそのことを隠そうともしない。

凜はため息をつきつつも、破格の保証金に目がくらみ、この汐碕に店を出すことに決めたのであった。

そこまで事を強引に進めるのであれば、彩に保証人になってくれと凜は頼んだのだが、「やーよ」の一言ですまされてしまった。

だいたい日本酒一辺倒だった彩が、いつの間にワインを飲むようになったのやら。きっとその悪友というのに入れ知恵されたに違いない。

とにもかくにも一〇月の末に鈴鳴屋は無事オープン。折しもクリスマス商戦前。妖怪たちの作った不思議なグッズは、すぐさま一〇代二〇代の若者世代に大受けしたのだった。

「熊の運勢キーホルダー、新しい箱開けちゃって！」

「天気予報下駄ももうなくなっちゃったから、倉庫から持って来て！」

「あ、レジお願い」

「あー、その箱はそっちに並べて。お札はレジの前に並べるから、こっちに貸して！」

開店してから、ひっきりなしに凜の指示が飛ぶ。

それに対応しているのが、昨日この街に来たばかりの天音、そして凜の飼う六匹の猫たちだった。

猫は器用にも商品棚の間を縫うように走り回り、客を誘導する。

そのかわいらしさにお客たちが歓声を上げるものだから、お店の中は終始賑やかだった。

だいたい天音など、来て早々なんの説明もなくいきなり実戦投入。どんな商品があってそれがどういう法則で並べられているかも解らないまま、わたわたと店内を走り回る羽目に。

ただ幸いだったのが、これらのグッズの製作に天音自身が関わっていることだった。鈴鳴屋で売っている商品は、すべて何らかの不思議な力が込められている。

例えば運勢を占うキーホルダーはちゃんと星詠みの魔の力が封じ込められているし、天気予報下駄は風神雷神のご機嫌を伺う。

他にも恋愛成就のお守り、金運を呼び込む招き猫の置物、様々な効能のある御札などなどこれらはすべては妖怪たちの力や魔術を扱う天音の力によって生み出された代物なのだ。

世間でパワースポットだの占いだのが流行っているところにささやかな本物を置けば儲かると読んだ凜の勘が当たったのだ。

「きゃ――――!!」

店の中にひときわ大きな黄色い歓声が響き渡る。

「ほら、これこれ、可愛いでしょ？ これもあれも……あっちもー！」

他の客を押しのけて、赤い髪をゆらしながら一人の女の子が店に入ってくる。

「おい、落ち着けよやすら。ほかのお客さんに迷惑だろ？」

それを慌てて後ろから銀髪の学生がとめる。

朝日奈やすらと天野光人だ。

その後ろにゾロゾロと同じ制服の女の子たちが並ぶ。どの子も目を輝かせているのだが、興味なさそうな生徒が一人いた。

神宮司雛子である。

「グッズねぇ……」

雛子はとりあえず手近にある熊のぬいぐるみを手に取った。可愛いがしかしどこか素人臭のする野暮ったさを感じる。タグには「不眠症の人に最適、一緒に抱いて寝れば心地よく眠れます」と書いてある。

「ふ～ん……」

まぁ、気休め程度にはなるのかも……なんて事を思いながら、そのぬいぐるみを元の棚に戻そうとした時だった。フッと雛子は非常に弱い魔の力を感じ取った。

「え？」

慌ててぬいぐるみをもう一度、間近で見つめ直す。

掌の神経に意識を集中させ、雛子は胸元で小さな印を結ぶと、小声で呪文を唱えた。

魔の力を見つける術「ディテクト・マジック」。魔法使いの初歩の初歩の術だった。

『本来こんな人の多い場所では使いたくなかったけれど……』

とはいえ、雛子ほどの術者になればこれくらいの呪文を誰にも気付かれずに成立させることは造作もないことだった。

呪文が完成すると、雛子の視界には熊のぬいぐるみが淡い光に包まれてうつる。そう、このぬいぐるみは魔法の品、マジック・アイテムだったのだ。

『睡眠の呪文……しかもそれがぬいぐるみに付与されている……？』

魔法というものはその場で使うもの。したがって呪文を唱え終わると同時に魔法の力も発動してしまう。

このぬいぐるみのように魔法の力を物質に与えるというのは、より高度な術を必要とするのだ。この術を「付与（ふよ）」と言って、雛子もまだ研究段階の術だった。

「光人、光人！」

雛子は思わず興奮して、やすらを羽交い締めにしている光人を呼び止めた。

「ん？　なんだ、どうしたんだ？」

めんどくさそうに銀髪の青年が雛子の方を振り向く。

「光人、これ、これ！」

「なんだ、そのぬいぐるみが欲しいのか？」

「いや、そうじゃなくて……！」

しかしそこで雛子が目にしたものは、まばゆいばかりの光の洪水だった。

「うわぁ……全部、光ってる」

棚に並んでいるものすべてが何らかの光を発している。そう、この店で売られているものには全て魔法の力がかけられているのだ。

「おい、どうしたんだ雛子？」

「この店は……いったい？」

「いったい？」

「光人は感じないのか？」

「何を？」

「魔の力を、さ」

「え？」

光人は魔という言葉を聞いて、羽交（はが）い締めにしていた腕の力をゆるめた。

「どわっ！」

急に力が抜けたものだから、光人から逃れようとしいてたやすらがそのまま前に転んでしまった。
「いったいわね～～、離すんなら離すって言ってよ！」
無茶苦茶な理論だ。
「見て、光人、これにはスリープ、睡眠の呪文がかかってる。こっちの壁掛け用の留め金はレビテート、この光るキーホルダーはコンティニュアル・ライトの呪文……このお店で売っているものは全部なんらかの魔法がかけてある」
「そんなバカな……」
光人は雛子から奪い取るように熊のぬいぐるみを手に取った。
今まで気にしていなかったが、気付いたとたん、光人もその魔法の力を感じ取る。
「ほら、ね？」
「あぁ、確かに、これはマジック・アイテムだ」

だがいったいどうしてこんなものが……誰の手によって……？
「あの、その熊のぬいぐるみがお気に入りですか？ 彼女さんにプレゼントですか？」
雛子と光人のやりとりを見ていたのだろうか？ 店員が光人に近付くと、そう声をかけてきた。昨日この街に来たばかりの天音である。
黒いゴシック・ロリータ調の服に、猫がトレード・マークのお店のエプロン。なんだかその組み合わせはアンバランスだ。
「彼女？」
光人がマヌケな声を出す。
「そっちに反応する……」
反応すべきは「彼女」ではなく「ぬいぐるみ」の方だと思うのだが……それに光人の彼女はやすらであって自分ではない、と雛子は少し呆れた。
「あ、いや、なんでもないんだ……ちょっと気になっ

て、もう少し見させてもらうよ」
光人も慌ててぬいぐるみを雛子に押しつけると、その場を取り繕った。
「あ、はい、ゆっくり見ていって下さいね」
天音はにっこりと営業スマイルを見せると、次のターゲットを見つけたのか、別のお客さんの方へと歩いて行ってしまった。
「あのね」
さらに雛子が呆れる。
「なんだよ？」
「この熊の事を質問するとか、どこで作ってるか聞くとか、そういう気は回らなかったのか、光人？」
「え、あ、いや、急に店員が来たので……」
「もう……」
「それにしてもずいぶんとご執心だな？」
「だって光人、こんなの誰でも作れるものじゃないよ」
「そりゃそうだが……」
「付与、つまりエンチャントの呪文を使って、しかもすごく魔力を弱めてかけてある。バランスも絶妙。こんな魔法は、見たことがない」
「へー」
「へーって光人……関心なさそう」
「いや、別にそう言うワケじゃないけど……」
「とにかく、かなりの魔の使い手が作ったのは間違いない……！」
「あぁ、なるほどね」
光人は妙に納得して、ポンと手を打った。
「何を納得しているの、光人？」
「ん？ 要するに、悔しいんだろ？」
「え!?」
「自分よりも上の魔法使いがいることに、さ。だからご執心なワケだ」
「そ、そんなこと……ある!!」

そうなのだ。かつて存在した伝説のマジック・アイテムとかなら、解る。それならば自分の魔力よりも遙かに高いレベルのマジック・アイテムがあってもおかしくはない。伝説の、今は亡き魔法使いが作ったことだろう。

けれど、目の前にあるこの熊のぬいぐるみは違う。今生きている誰かが作ったものだ。そしてそれは雛子よりもレベルの高い魔法を使っているのだ。雛子がまだ到達していない魔法を……！

「これください」

「毎度〜〜〜二八〇〇円になります」

いつの間にか雛子は、その熊のぬいぐるみを持ってレジに並んでいたのだった。

＊　＊　＊

「ひ〜ふ〜み〜よ〜……♪」

凛が二本の尻尾をくねくねと絡ませながら、一万円札を数える。その尻尾の動きは、上機嫌な証拠だ。

「ふぅ……」

その隣で天音が短くため息をついた。

「疲れた……ん――――！」

そしてエプロンを畳んだあと、大きく伸びをする。

「天音が来てくれたおかげで、ずいぶんと楽になったわよ」

トントンとお札をそろえる凛は、笑顔が止まらない。

「まさかこんなに盛況だったとは思ってもみなかった……」

「あたしも、あたしも。でもそれだけ癒されたいって人が多いって事よね」

「癒されたい？」

「そ。恋に悩んでいる人、勉強に困っている人、将来が不安な人……この科学文明の時代に、テレビや雑誌でも必ずと言っていいほど占いとかあるじゃない？」

「ええ」
「人間みんな、自分で物事を決めたくないんだなって、そう思ったのよ。自分で決めたことを誰かに認めて欲しい、正しいって言って欲しいって」
「凛……」
「だからそれを後押ししてあげるグッズって絶対売れるって思ったのよね。妖怪たちの力や天音の魔の力を使えば、そういうアイテムってすぐ作れるし」
「でも、ちょっと不安もあるの、凛」
「何よ？」
「魔法のかかったものを、こんなに大っぴらに売ってしまっていいのかって……」
「大丈夫よぉ、魔法って言ったって時限式で、開封してから三ヶ月しか効果がないものばかりだし、どれも弱い魔法しかかかってないしね～」
「それはそうだけど……」
「人間ってのはね、最初に効果がちゃんとあれば、魔力が切れても効果があると信じ込んで使ってくれるものなのよ。自己暗示とかプラシーボの一種ってヤツ？」
「もちろん騙されない人もいるけれど、でも、ちゃんと有効期限も書いてあるし、有効期限が切れたら魔法は一切残らないんだから」
「うん……」
「でもこの分じゃ、在庫がなくなるのも時間の問題かもね～」
「クリスマスまで持つかしら……」
「持たないわね、確実に」
「そう……また魔力を込める毎日が来るのね……」
「頼りにしてるわよ、天音」
「ふぅ……」
なんだかここに来てからため息ばかりついているような気がする……。
「そんなにため息つかないでよ！ 言うでしょ？ ため

息の数だけ幸せが逃げていくって」
「そ、それもそうね」
「いっぱい儲かったんだから、美味しいものでも食べに行きましょ？」
「あ、う、うん！」

＊　＊　＊

「う～～～～ん……」
一方の雛子は熊のぬいぐるみと向き合って、何度も何度もうなっていた。
既に何時間が経過しているだろうか？
デスクの上には赤い布が敷かれ、そこには六芒星（ろくぼうせい）の魔法陣。そして聖水と手書きのラテン文字。
六芒星のど真ん中には、あの熊のぬいぐるみが置いてある。傍（はた）から見れば、熊のぬいぐるみを信仰する新手の宗教と間違えられるに違いない。
「うう～～～～ん……」
しかし雛子はお構いなしに、うなり続ける。
このぬいぐるみの仕掛けが、雛子には解らないのだ。
「少しでも術者の痕跡が解ればと思ったのだけど……」
雛子はふぅと一息つくと、全てをあきらめ、ぬいぐるみを魔法陣から下ろした。
結局無駄骨に終わった。
「二八〇〇円、無駄に使ってしまった……悔しい」
あれからいろいろ考えた。
このぬいぐるみに魔法を施（ほどこ）した術者に会いたい。
けれど、お店の人に直接聞いても、正直に答えてくれるか解らない。かといって自分も術者だというのを打ち明けるにはリスクが高すぎる。ぬいぐるみから何かが解ればと思ったのに……。
時計を見ると、もう日付が変わろうとしていた。
鈴鳴屋から戻ってきて、夕食も食べずにずっとこの

ぬいぐるみと向き合ってきた。

「もういっそ、この熊さんの力で寝ちゃおうかな……」

なんてことも思ったが、睡眠（スリープ）の呪文は自分には効かない。睡眠の呪文そのものは初歩の初歩の呪文で、ある程度魔法に慣れた雛子には何の効果もないのだ。

『効果がない？』

雛子は自分の思考の中で現れた言葉に気がついた。

「そうだ……！」

このぬいぐるみにかかっている魔法を、解除してしまおう。

それが可能なのかどうかは、このぬいぐるみに睡眠の呪文を付与した術者の力量による。雛子が足許（あしもと）にも及ばないような魔法使いなら、この睡眠の魔法を打ち消すことはできないが、雛子よりも少しくらい上の魔法使いなら、ひょっとしたら消せるかもしれない。

「うん！」

雛子は自分を言い聞かせるかのように頷くと、別の赤いフェルトの布を取り出した。そしてすっと指をフェルトになぞると共に魔法陣を描く。

「ぬいぐるみにかかっている付与が強制的に消されることは、術者自身の魔法が消されることと同じこと」

つまり……このぬいぐるみを買った誰かが、付与を解除しようとしたことだけは術者に伝わるはず……！

「届け……ディスペル・マジック……!!」

雛子は呪文の最後の言葉を唱えると、ぬいぐるみに触れた。

力が確かに作用した感触は伝わってくるが……しかし……。

「……くっ」

ダメか……。

ガクッと雛子の力が抜ける。

熊のぬいぐるみは笑顔を崩さぬまま、そこに黙って座っていた。睡眠の魔法もそのままに……。

ぬいぐるみに魔法を付与した術者は、雛子のディスペルの力に抵抗してしまったようだ。

しかし、その雛子の力は少なくとも天音には届いていたようだった。

鈴鳴屋では、天音がベッドから上半身を起こして、ボーッと空を見つめていた。

「どしたの？」

それに気付いた凛が眠い目をこすりながら、天音に声をかけた。

ただ上半身を起こしただけなのに、それに気付くとはさすが猫又。

「枕が変わると眠れない？ それとも、陸と一緒に寝たいとか？」

凛がニヤニヤする。

「そ、そんなこと……！」

陸と一緒とか言われて、天音の頭の中で陸とのことがフラッシュバックする。それは陸と一緒の方が嬉しいけど……などという思いもわき起こってしまう。

しかし天音は慌ててその思いをブンブンと首を振って打ち消した。

「お兄ちゃんは、夕奈がずっと独り占めしてるから……」

陸とは何度も寝たけれども、そばにはいつも夕奈がいた。自分と陸が二人きりだったことはあまりない。

「そっか……」

凛も少し残念そうな声を出した。

「誰かが……」

「？」

「誰かが、わたしの力を打ち消そうとしたわ……凛」

「天音の力を、打ち消す？」

「……たぶん、わたしの付与を消そうとした」

「それって、商品のってこと？」

「うん……」

「そんなことってあり得るかしら？」

「ないと思うけど……もし、魔法を使える誰かが鈴鳴屋で売っているものを手に入れたとしたら……」
「ふ〜〜〜ん……」
凛は納得したようなそうでないような、曖昧な返事をする。
「で、それって何か問題？」
「え？」
「天音以外に魔法が使える人がいたとして、その人がうちの商品を買ったとして、何か問題があるのかって聞いてんのよ！」
「う〜ん……」
どうなんだろう。
解らない。
天音は言葉につまった。
「好奇心から魔法を消そうとしたとか……？」
自分だったらどうするかを考え、そしてそれをそのまま凛へ返した。
「んじゃ、ま、気にすることないか」
「え？」
「なんかそれで問題事とか起きたらイヤだけど、まー大丈夫そうね」
「う、うん、たぶん……」
売れてしまった商品にかかった魔法を打ち消されたところで、鈴鳴屋も別に損はしないし、持ち主は魔法の効果がなくなることを承知でかけたわけだから……問題はないはずだった。
「寝よ寝よ！ 明日も朝から仕事なんだから」
「うん、起こしてちゃってごめんなさい」
「いいわよ、別に」
凛はクスリと笑みを浮かべて、布団に潜り込む。
「おやすみなさい」
天音もそんな凛の姿を見届けると、ベッドに身体を横たえ、そしてまぶたを閉じた。

＊　＊　＊

「それじゃぁ、今日は先に帰るから」
そそくさと鞄に筆記用具を入れ、最後に読んでいた分厚い本をまるで鞄にフタをするかのようにしまった。
「あら、いつもより早いじゃない。っていうかあたしたちと帰んないの？」
やすらが目をまん丸くして、出口へ向かう雛子の姿を追った。
「き、今日はちょっと用事がある」
少しいつもと違うイントネーション。雛子は緊張していた。
「ふ～ん」
やすらは納得がいかないような返事をする。それが余計に雛子を緊張させた。素直にこの生徒会室から出させてくれればいいのに……と思う。これだから人を疑うのが商売な人を相手にするのは面倒くさいと雛子は心の中でため息をついた。
「お疲れさん」
「お疲れ様、ごきげんよう」
しかし光人と瑠璃火は笑顔で雛子を送り出してくれた。
「あ、うん、また明日」
やすらが深入りしてこないうちに雛子はさっさと生徒会室を出て行った。
「あ……行っちゃった……」
やすらが残念そうに、閉められたドアを見つめた。
「何か興味があるものができたんだろう」
そんなやすらの背中を光人が笑みを浮かべながら、眺める。
「興味のあるもの？」
「まぁ、なんですの？」
「鈴鳴屋さ」
「ん？ 昨日行ったじゃない？？ 一番興味なさそうに

してたクセに！なによ!?」
「何かお気に入りのグッズを見つけたみたいなんだよ」
「へー」
「神宮司さんがああいうファンシーなものに興味を持つなんて、珍しいですわね」
「ファンシーねぇ……」
光人は昨日雛子が持っていた熊のぬいぐるみを思い出していた。
どこか素人っぽくてバランスがいまいちなんだけど、それなりにかわいいぬいぐるみ。
そしてそこから香る、魔の力。
微弱だけれども、本物の魔の力。
「雛子が興味を持つことなんて、一つしかないだろ？」
「へ、そうなの？」
「そうなんですか？」

やすらと瑠璃火は首をかしげた。
「変に暴走しなければいいんだけどな……」
魔のこととなると雛子は自制がきかなくなる。光人はそれが心配だった。そしてそれが心配だからこそ、自分の目の届く範囲に雛子を置いているのだ。
雛子自身もそれが解っているらしく、光人から遠く離れたりはしない。
ただ生徒会の役員になることだけは、彼女は断固拒否した。
それはおそらく、完全に光人の保護下に入るのもまた、窮屈だと思っているのだろう。
「魔……ですか？」
そんな光人の神妙な表情を読み取った瑠璃火が、ぼそりと尋ねた。
「それ以外に何があるんだ？」
「ちょっと！ほっといていいの？」
やすらがガタッと席を立つ。

「何か問題があれば、それはおまえのところに来るだろ、やすら」
やすらはこの汐碕を魔などの超常現象から守るのが勤め。もし雛子が大きな事件に巻き込まれるようなことがあれば、それはいの一番にやすらの元に知らされるだろう。
「それはそうだけど……」
「俺たちが動いたら動いたで、大事になっちまうんだからさ」
やれやれと光人は肩をたたくと、手に持っていた書類をそろえ直した。
「変なことにならなきゃいいけど」
「まだわかんないさ」
しかし胸騒ぎはする。とはいえ同時に自分たちが関わる問題でもないような、そんな気が光人はしていた。
天使である自分には、関係のない……。

＊　＊　＊

鈴鳴屋は今日も大盛況だった。
外にあふれんばかりの人、人、人。
とはいえ、ほとんどの客は、女性と子供だった。
「う……」
雛子は人混み酔いをしてしまった。
いつも一人でいる雛子にとって、このような人がごった返す場所は非常に苦手なのだ。
そもそも鈴鳴屋は汐碕市の商業地区にあるパサージュの一角に入っている。そのため、鈴鳴屋に限らず、人通りは多く、活気にあふれていた。
パサージュというのは簡単に言えばアーケードだ。
しかし建物は古く、一八〜一九世紀のパリを彷彿(ほうふつ)とさせるレンガ造りの建物に、ガラス製の美しい屋根がアーケード上に載っている。
一〜三階部分が売り場で、三階部分にガラス屋根が

あるのだが、建物はその上も続き、居住空間となっている。店主や従業員達は、この居住空間に住むことができるのである。

鈴鳴屋が店として使っているのは二階まで。

三階は倉庫に、四階は凜と、今は天音が一緒に住み、五階からはまた倉庫となっている。

雛子は商品を見るフリをしながら、店員の動向を観察した。

基本的に店員は茶髪の元気な女の子（凜）と、桃髪の物静かそうな女の子（天音）の二人。

商品への案内は六匹の猫が担当しているようだった。

猫が店員の言うことを聞くという部分も、おそらく魔が関係しているのだろうと雛子は踏んでいた。

だが、呪文を使っているようには見えなかった。

店員の方はといえば、茶髪の方が桃髪の方に指示しているところを見ると、茶が店長、桃が店員と言ったところであろう。となると、魔の事情に詳しいのは店長である茶髪のほうであろうと雛子は考えた。

それにしても客の数に対して、圧倒的に店員の手が足りていない。

これでは万引きもし放題であろう。

「ふむ……」

よからぬ思考が雛子の頭の中を巡った。

わざと見つかるような方法で万引きをするのもアリかもしれない。そうして店長と無理矢理会う機会を作るのだ。

もしくは、普通の人には気づかないが、魔を扱う者には気づくような魔法を使う……。

でもそんなのって何があるだろうか。

些細な魔法は、魔法を使える者だって気付かないものだ。もしここでディスペルの呪文が使えれば一番良かったのであろうが、あの呪文を誰にも悟られぬように唱えるのは難しい。魔法陣が必要だし、大きな身振り手振りもする。街中（まちなか）でそんなことをしようものなら

後ろ指さされることは必至。

『ええい、ままよ！』

「変に暴走しなければいいんだが」という光人の心配通り、雛子は善悪の判断よりも、魔法使いに会うことを優先してしまった。

雛子は小さいけれども魔力が一番強いグッズを選んだ。それは絶対なくならないボールペンというものだった。持ち主の元に必ず戻ってくると言う、空間移動系の魔法が込められたボールペン。

雛子はそれを巧みにポケットに忍ばせると、そそくさと鈴鳴屋をあとにした。

すぐに猫が自分に目をつけたことを雛子は察知した。そのためにも今日は動物と会話をするための呪文を用意してある。

雛子はパサージュを早歩きで通り抜けた。

それから路面電車の通る広い大通りを信号を守って渡り、別のパサージュへと入り、小さな袋小路に自ら入って、そこで立ち止まった。

この行動は、人間からみれば明らかにワナと解るはずだ。

しかし追跡者である猫はノコノコと雛子のあとをついてきた。ということは万引き対策は猫に丸投げにされており、この時点では店主は万引きに気づいていないということになる。

一方の猫の方はといえば、雛子を追跡すると同時に、周囲の野良猫たちを集めていた。雛子に気づかれぬよう、一匹、また一匹と建物の隙間から雛子を取り囲むように追跡していく。

そして雛子が袋小路に入った頃には、一二匹の猫がそろっていた。

「ふむ……」

実に優秀だと雛子は感心した。

雛子はここで、もう一度ディスペル・マジックを試みた。ここならば、自分を見ているのはネコしかいな

い。雛子は魔法陣を石畳の地面に描きだし、ポケットに忍ばせていたあのボールペンを取りだした。

これでディスペルが成功すれば、術者に雛子がディスペルを仕掛けたこと、そして猫を通して雛子がいる場所が伝わるに違いないと思ったのだ。

「届け！ ディスペル・マジック!!」

雛子、渾身の魔術！

だがしかし……。

「……」

ボールペンに変化はなかった。

だが諦めるのはまだ早い。

まだ猫と直接会話する方法がある。

『猫よ、主に伝えて……魔を使う者が待っていると』

そう言って盗んだボールペンをちらつかせた。

猫は雛子の言葉を聞き取って、初めて雛子が普通の人間ではないと言うことに気づいたらしい。雛子を取り囲んでいた一一匹の猫がすぐさま立ち去ったのを雛子は悟った。

『なるほど、勝てない相手と解ると、諦めるように教育されているのか！』

しまったと思った。

このまま猫に帰られるのはまずい！

雛子が猫の身体を動けないように、呪文を唱えようとしたその時だった。

「だめ!!」

いきなり目の前に桃髪の女の子が現れたかと思うと、雛子に飛びついたのだった。

インヴィジビリティ……姿を隠す魔術だった。桃髪の女の子（天音）は姿を消して、雛子のあとを追っていたのだ。そして雛子が猫に呪文をかける＝猫に何か危害を加えようと勘違いしたのだろう。

それよりも雛子が驚いたのは、現れたのが茶髪の方ではなく、桃髪の方だったことだ。

「やっと、会えた」

だが雛子は目の前に現れた桃髪の少女を抱き留めると、嬉しそうに笑った。

「きゃ…」

そしてギュッと抱きしめる。

自分を超えた魔法使い。

自分のディスペルの呪文をことごとくはねのけた魔法使い。

そこには嫉妬があったはずだったが、そんなことよりも雛子の心の中は嬉しさで満たされていたのである。

それは、自分以外の魔法使いに会えたことだった。

自分以外にも魔法を使う者がいること、そしてその魔法使いに会えたこと。雛子はそれが嬉しくてたまらなかったのだ。

鈴鳴